小さな幸せ

平和鳩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小さな幸せ

【Ｎコード】
Ｎ３８０４Ｌ

【作者名】
平和鳩

【あらすじ】
小さな幸せを感じることができる。それだけで満足できる「俺」と、「彼女」の小さな小さな恋のお話。

プロローグ

幸せの感じ方ってのは人それぞれだと思う。
茶柱が立っていたり、卵を割ったら双子だったり、財布の中の一円玉をぴったり使いきったときだったり、幸せの感じ方は人それぞれ多種多様、千差万別なものだと思う。
だから、俺だっていろんなことに幸せを感じる、当然だろ？
ただ、俺は他の人に比べるとほんのちょっとしたささいなことにも幸せを感じることができる。
それは、他人から見たらとても素晴らしいことだと思うかもしれない。
けど、厳密にいうと俺は、ささいなことにでも幸せを感じれるのではなく、ささいな幸せにしか出会ったことがないのだ。
おみくじを引いてもいつも小吉、もしくは凶。
くじ引きをしても毎度のごとくポケットティッシュ。たまに当たることがあってもポケットティッシュがボックスティッシュに変身するだけ。
別に、俺はそのことに不満を抱いているわけではない。
人から見れば不幸と思われることでも、見方を変えれば小さな幸せに変えれるのだから。
だから、俺はこんな人生を歩むのも悪くないかなと思ってる。
平平凡凡とまではいかない人生だけど、けっして最悪なわけではないから。
幸せと感じることができる心さえもっていれば、人間らしく生活できるならそれでいい。
俺は高望なんてしないのだ。
幸運に期待するなんて無駄なことだとわかっているから。
幸運に期待して身を滅ぼした人たちを知っているから。
そうだ、期待するなんて野暮なことだ。

自分の力で掴みとれるだけの、手のひらで包めるだけの幸せで十分だ。
そうすれば、ほら、この世界だって十分に楽しめるだろ？
不幸体質の俺が楽しめているんだから、普通の平平凡凡な生活を送ってる人達も非日常なんかに憧れず、今感じることができる幸せをしっかり大切にした方がいいんじゃないかい？
まあ、これは俺の意見だから適当にスルーしてもらっても構わないが。
とりあえず、俺が言いたいことは、その一、高望するな。
その二、幸せは自分で掴みとれ、運任せにするな。
その三、感じた幸せを大切にしろ、だ。

てことで、俺はちょっくら行ってくる。
うん？　どこに行くかって？
そんなの決まってるだろ。
目の前に転がっている俺が掴みとれるだけの小さな幸せを全力で掴み取りに行くのさ。

プロローグ（後書き）

次の更新は来週の土曜日ごろになると思います。ではでは。

小銭少女と不幸少年

「うわぁ！」

学校遅刻寸前で猛ダッシュを決め込んでいた俺だったが、昨日の夜降った雨によって通学路は大変滑りやすくなっており、水たまりに差し掛かった瞬間、盛大に派手にズッコケてしまった。

勢いが勢いだっただけに、全身びしょ濡れである。

しかし、びしょ濡れになったからといって歩みを止めることはない。

このまま遅刻してしまうと、生活指導担当の岡村の鉄拳制裁間違いなしである。

今回遅刻したら、記念すべき累計十回目となり、おそらく制裁もフルコースとなるだろう。

そんなのは絶対嫌だ！！

だから、俺はすぐ立ち上がり爆走を開始する。

「くそ、目覚ましのアホ、雨のアホ、水たまりのアホ、俺のアホー！！」

どうしようもないバカな叫び声を上げながら、ひたすら突き進む。

そのとき、視界の端で何かがキラッと光った。

本来、そんなものに気を取られている場合ではないのだが、何故か気になる。

急いで近づいてサッと拾い上げる。

拾い上げたものをよく見てみると――――――薄汚れた五百円玉だった。

お……思いがけないラッキーである。学生にとって五百円ってのはものすごく大きな存在である。

硬貨のなかで最も大きく、最も価値のあるもの……そう、五百円玉とは硬貨の王様なのである！

その存在価値を力説し終わったところで急いでポケットに五百円

玉を滑り込まそうとする。
財布に入れてる暇なんてない。遅刻寸前だし、善は急げである。
善は急げの使い方が間違っている気もするが……。
「よし、さっさと頂戴しとくか……って――――――グフっ！？」
勢いよく突き飛ばされる俺の体。
再び、水浸しの路面をゴロゴロと転がる。
掴んでいた五百円玉も手のひらから転げ落ちてしまった。
いったい、何なんだ！？　確かに俺は、落し物を自分のものにしようとした不届きものかもしれないが、この仕打ちは酷すぎるんじゃね？
俺は痛む体を無理やり奮い立たせ、顔を上げるとそこには――――少女がいた。
髪を頭の後ろでひとくくりにしたポニーテール。
スラッとした長い脚で、後ろ姿しか見えないが、何故かその少女がとても美しい気がした。
って、何言ってんだ俺？　俺はたぶんだけどこの少女に突き飛ばされて全身びしょ濡れにされたんだぞ？
ここは、一つ文句でも言うところだろうと思い「ちょっと……」と声をかけようとしたところ、
「ごめんなさい！！」
その少女はものすごい勢いで謝罪の言葉を口にした。
「あなたが、その……五百円玉を拾っていたから、警察に届けるのかな？って思ったけど、私の独断と偏見でこの人はきっと自分のものにしちゃうなって思って、それなら私のものにしてもいいかなって思って、タックルかましてぶん捕っちゃいました、テヘ。でも、悪気はないんですよ。だから、許してくださいね」
矢継ぎ早に繰り出される謝罪の言葉……いや、謝罪の言葉少ねぇ！！
なんか、俺悪者にされてるんだけど。いや、実際悪者なんだけど、そんなこといったらこいつも十分悪者じゃねえか！

「いや、ちょっと待……」
「ということで、私は遅刻寸前のピンチピンチ大ピンチなんでアディオス、不幸な少年さん、ハハハハ」
俺の言葉をさえぎり、颯爽とこの場を離れようとする極悪少女。
……ん？　遅刻寸前？
よく見るとその少女が身にまとっていた衣服は、俺が通っている高校――――冊上高校――――のものだった。
同じ高校かよ！　と心の中で呟かずにはいられない。
こんな極悪少女と同じ学び舎に通っているなんて恥ずかしい限りである、全く。
少女が俺の目の前を走って通り過ぎようとしたところ、俺にとっては幸、少女にとっては不幸を運ぶ風がふわりと吹いた。
やさしい風に包まれ、少女の短いスカートがふわりと持ちあがる。
少女は急いで、スカートを抑えたが時すでに遅し。俺の網膜にしっかりとそいつは焼き付けられた。
「し……縞縞」
青と白のストライプ、縞縞柄のそいつが五百円玉を奪われた俺を慰めるようににっこりと笑ったような気がした。
あー、ラッキーだな。こんなベタベタな展開なかなかお目にかかれないよ、とか考えてたら、真っ赤な顔をした少女がこちらを振り返りバッグを振り上げていた。
俺の危険感知センサーが激しく反応する。
「いやいや、そのバッグ何？　その中に教科書とか一杯入ってるでしょ？　それはヤバイな。俺ボロボロなのに、それはないな。　それ振り下ろしたら真っ赤な花が……」
とか言ってる最中にその少女は勢いよくバッグを振り落としてきた。
ゴツン。
リアルに痛いダメージが俺の頭を襲う。
こいつ、殴りやがった……、タックルかまされ、五百円玉奪われ、

最後はバッグでフィニッシュって酷いんじゃないのだろうか？　俺だって見たくて見たわけじゃないのに。
ああ、なんか視界が揺らぐ。意識も途切れそうだ……。
ポニーテール、同じ学校、長い脚、縞縞パンツ、そして赤らめた顔……走馬灯のように俺の頭に流れる。
なんか、腹立ってきた。
硬貨を自分のものにしたのは悪いことさ！　不可抗力とはいえ、スカートの中見ちゃったことも悪いことかもしれない。
けど、腹が立つ。
悪いことした俺だけど何故ここまでボロボロにされなければいけないんだ！？
こいつだって十分悪いことしてるじゃないか！！
割に合わねぇ。俺だけ痛い目合うのはどう考えてもおかしい！！
くそ、絶対探し出して俺に誠意を込めた謝罪をさせてやる！！
そんなことを考えながら俺の意識は途切れていった。

あ、そういえば俺遅刻確定じゃん。

小銭少女と不幸少年（後書き）

間隔空きましたが、これから頑張っていきます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3804l/

小さな幸せ

2010年10月8日16時11分発行